

事業所名：グループホーム「ひまわり」

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0370300089		
法人名	社会福祉法人 典人会		
事業所名	グループホーム ひまわり		
所在地	岩手県大船渡市大船渡町字山馬越196番地		
自己評価作成日	平成 22年 11月 15日	評価結果市町村受理日	平成 24年 3月 14日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www2.iwate-silverz.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=0370300089&SCD=370
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわての保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0021 岩手県盛岡市中央通三丁目7番30号
訪問調査日	平成 23 年 11 月 29 日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

グループホーム「ひまわり」は平成8年に開所し来月には16年目を迎えます。今年は東日本大震災の影響で、過酷な生活を余儀なくされましたが、入居者・家族・職員とが一致団結して乗り越える事ができました。しかし、被災によって、共同生活が困難な方を受入れることになり、試行錯誤の連続でしたが、7カ月かかって穏やかな生活を取り戻すことができました。「ひまわり」での生活は難しいのではないかと何度も考えましたが、その度に、職員みんなで議論し合いながら、あきらめないうで乗り越えられたことは、私達職員の自信につながりました。また、今年度は2名の方を「ひまわり」で看取りました。これまで培ってきた経験と自信をもとに対応することができました。現在の理念も職員みんなで構築したもので、宮澤賢治の「雨ニモマケズ 風ニモマケズ・・・」の精神を受け継いだものになっております。今年度も引き続きドリームアゲインを行っております。震災後だからこそこれまで以上に、入居者の夢の実現を目指しています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開所から16年目を迎え、今年3月に発生した未曾有の大災害をも乗り越えた豊かな経験と実績を有する事業所である。利用者・職員が変わるので事業所理念も変わるべきという方針のもと、今年は、宮澤賢治の「雨ニモマケズ」の精神を受け継ぐユニークでわかりやすい理念としており、生活上の小さな喜び、周囲の人たちへの気遣いや調和などが目指されている。看取りについても、昨年の1名に加え、今年は2名を看取った事は、本人、家族の意向を踏まえ、医師、職員等関係者の綿密な連携によるものであり、これらの体験で得たノウハウと思いを受け継ぎ利用者・家族が安心して納得した最後を迎えられるよう支援している。また、今回の震災もあって、行きたい場所が今も存在していること、会いたい人が今も元気であることの価値を見つめ直し、ドリームアゲインの一環としての「ふるさと訪問」は、特に力を入れ取り組んでいる。震災被害の影響が今なお色濃いなかで様々な悩むことがあっても、利用者、家族、職員、近隣住民の「今」を誠実にみつめ、大切にしていこうとする姿勢が感じられる事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

事業所名 : グループホーム「ひまわり」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人の理念である「住み慣れた地域でその人らしく最後まで」のもと、事業所では職員みなで理念を構築している。現在は、宮澤賢治の「雨ニモ負ケズ」の精神を反映した理念となっている。	法人の理念「住み慣れた地域でその人らしく最後まで」は不変であるが、それに基づく事業所理念は、職員全員で話し合っ毎年決めている。今年度は宮澤賢治の「雨ニモ負ケズ」をベースに自己中心的でなく周囲のことに気を使うといった精神を反映した理念としている。	利用者の地域生活の継続支援を基本として宮澤賢治の「雨ニモ負ケズ」の精神を反映した事業所独自の理念を職員全員参加の下で作り上げ共有実践するプロセスは素晴らしいものがある。今後においてもこの取り組む姿勢・プロセス等を大事にしていてもらいたい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	2カ月に1度、運営推進会議を通して、地域住民と意見交換を行っている。また、毎日の買い物やドライブ、行事に地域住民を招待するといったように交流する機会をもつよう取り組んでいる。今後は地域の一員として防災関係に力を注いでいきたい。	今まで希薄であった地域の防災意識が今回の震災によって、防災意識の高まりがみられる。これを受けてホームでも地域と積極的に関わりを持つという姿勢で「気仙ボケー座」の地域公演を通しての防災意識の啓蒙啓発活動や流しソーメン等の行事、買い物やドライブ等で交流する機会を持つようしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	現在は、震災の影響もあり、例年通りの地域の人との交流会はできていません。しかし、これまで以上に地域との繋がりを持つチャンスととらえて今後活動を積極的に行いたい。法人が啓蒙活動として行っているボランティア劇団「気仙ボケー座」の活動にも再開予定である。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	以前から地域の防災について話し合っていたが、震災を体験し、その話し合いが現実味をおびてきた。地域の集会に参加させていただくことも決まった。年に1回は、会議の後、食事を開催し、利用者、職員との交流の場を設けて「ひまわり」を知っていただく機会もある。	今回の震災をきっかけとして、地域に自主防災組織がないこと、地域自体のつながりが希薄であるという事を認識し、地域活動促進の一端を担えるよう地域の総会や会議に参加することが運営推進協議会を通して決まった。また、運営推進協議会のメンバーと利用者、職員が参加する食事も年1回行っている。	防災体制構築といった観点のみでの地域協働は、その堅苦しさから参加できる住民を制限してしまうこともあり得る。防災を背景としながらも地域の子供達や多様な人々にも関心を持ってもらうような、楽しさと柔軟性のある取り組みにも期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議においての連携はもちろんのこと、震災後は、市が主催をする地域ケア会議等に参加し、震災を乗り越えるための話し合いや、今後の対応について話し合う場に参加している。また、防災改修支援事業においても相談をしながら意見を頂いている。	今回の震災後、情報の共有が大事という認識のもと、今まで参加していなかった地域ケア会議への参加や同会議終了後のワークショップを立ち上げ、市役所との連携強化に努めている。	市役所との連携は、行政主導でなくホーム自ら参加し決定していくという協働関係の構築が大切と思われる。その意味でワークショップの立ち上げは大きな意義があるので今後の活動等について期待したい。
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	研修会やスタッフミーティングでの勉強会を通して学び、身体的拘束の禁止は当たり前と全スタッフ共通認識しております。施錠に関しては、防犯という事から夜間のみ行なっているが、拘束の意味はまったくない。	身体拘束をしない事については、今までは法人の勉強会に参加していたが、今年度からは、ホームのミーティングの場で勉強会を実施し、「身体拘束禁止は当たり前」のこととして特にスピーチロックを中心に職員の認識共有を図っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修会やスタッフミーティングでの勉強会を通して学び、虐待の防止は当たり前と全スタッフ共通認識しております。ただ、毎日の生活の中で親しくなりすぎて、くだけすぎた言葉使いやとっさに出る配慮の無い言葉使いが出ない様、スタッフ同士指摘するよう心掛けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在、これらの制度を活用する機会はありませんが、日本認知症グループホーム協会の監事でもあり弁護士である方の研修を通じて学んでおります。何かあれば相談できるようになっております。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	重要事項説明書・契約書などの説明を十分にを行い、その上で署名・捺印を頂いております。不安や疑問があればいつの時点でも相談に乗れる事を伝えてあります。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	相談及び苦情受付を設けている旨、契約書及び重要事項説明書に記載、玄関にも掲げております。また、運営推進会議や家族会等のイベント等の場を設け、要望が出しやすいような工夫を行っております。	家族会等での意見要望は、家族とホームとの良い関係ができていないと出にくいとの認識のもと、イベント等を通して良好な関係を作り上げる工夫をしている。「意見を言うのは申し訳ない」と考えている家族にも、事業所の向上のためにもなんでも話してほしいと伝え続けている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月2回のひまわりミーティングや毎日の朝礼で意見、提案を聞く機会がある。それらが反映できるよう話し合い、取り組んでいる。また、意見が出やすいスタッフ関係を築くためにもスタッフの交流会も随時開催している。	管理者は職員が自由に意見を出せる環境作りと意識の共有を重視しており、全職員から積極的に意見・要望が出されている。出された意見・要望は、その場で全員で検討し、介護等に反映させるようにしている。また法人内の他事業所職員が研修で一定期間いる時も、新鮮な意見が得られる機会として捉えている。	これまで同様に、職員をはじめとした多くの人たちの意見を集約して活かしていく手法は、様々な実践の瑞々しさにつながっている。今後も「自分たちで作っていく事業所」という意識は大事にしていてもらいたい。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人とスタッフの絆が深まるように、金銭的な報酬以外にも非金銭的な「心の報酬」として、感謝・ワークライフバランス・文化・成長・環境に心掛けて頂いており、スタッフのやりがい、向上心の維持につながっております。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内での研修機会は、全体会をはじめJCPAT勉強会、看護部会など様々な勉強会、研修会があり、積極的に参加しております。外部の研修も積極的に研修機会を頂いております。全国規模の事例発表会に関しても今年度は2つ参加します。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県グループホーム協会の定例会への参加を中心に、そこで得た多くの気づきを持ち帰り、日々のケアに活かしている。また、今年度の10月より、県グループホーム協会の事務局をさせて頂き、大変貴重な勉強をさせて頂いております。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居される方が今何を望んでいるのか、何を必要としているのかを、本人、家族、スタッフが一緒になって話をし相談できる機会を設けている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居される前に何度か、家族と相談する機会を設けており、その際、傾聴し、家族の困っている事、不安な事を親身になって考え、一緒に解決していこうと思って頂ける事によって、信頼関係を築けるよう心掛けている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居者、家族、スタッフが一緒になり「その時、入居者が望んでいること、必要としていること」を検討して支援をしています。グループホームひまわりから他のサービスに移行されるときも十分協議をし入居者、家族に負担がかからないように心掛けています。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者、スタッフは常に「家族」であるという事を、お互い意識しあいながら、入居者が日々の生活において生きがいを感じて頂けるような生活の役割を発見し、それを実現できるような支援を心掛けております。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	個人個人の家族さん用の面会ノートを用意しており、面会時にはノートに記入して頂いております。また、面会時や電話でお話する際は、日々の入居者の様子を伝えたり、家族の最近の様子をお伺いしており、入居者、家族、スタッフの情報の共有に努めております。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	この度の震災を受けて、馴染みの人や場所を失った方もいらっしゃると思いますが、だからこそこれまで以上に入居者の馴染みの場所を訪問する「ふるさと訪問」に力を入れています。	今回の震災もあって、今のうちに馴染みの人や場所と親しんでもらいたいという考えのもとに、ドリームアゲインの一環として「ふるさと訪問」の重要性を再認識し、とくに力を注いで取り組んでいる。	今回の震災のなかでは多くの人たちが無事に過ごせている「今」の大切さを認識した。地域の現状から目をそらすことなく、そのなかでも利用者のかえがえのない「今」を支えるものとして、今後のドリームアゲインに期待したい。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	一緒に生活をしていると入居者同士で絆が生まれてきます。優しい声掛けをしたり、手を貸してくれる時もあります。毎日同じテーブルでお茶を飲み、食事をし、一緒にうたも歌います。時には、口げんかもしますが、それも大切な関わり合いと考え、「家族」という雰囲気作りに心掛けています。		

自己	外部	項目	外部評価	
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	隣接する施設に引っ越された方がいますが、時々顔を見に訪問しています。今回の震災で、緊急受入れをした方がいますが、定員オーバーということもあり、遠く離れた場所に引っ越しされました。落ち着いてから、市や家族と相談をしましたが、「ひまわり」に戻ってくることはできませんでした。住み慣れた場所から離れて暮らす結果となりとても残念です。	
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント				
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居者の願いや希望、嗜好などを把握するように努めております。本人確認の出来ない場合には、家族に伺ったり、生活歴等によりアセスメントを重ねて入居者の意向把握に努めております。	一方的な決めつけにならないようにしながら本人の生活歴やセンター方式により思いや意向の把握に努めている。本人確認出来ない場合は、家族から聞いたり、本人の表情等でくみ取って把握するようにしている。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居者、家族からお話を伺い、これまでの生活歴、地域性を考慮し、アセスメントを行っております。また、実際に「ふるさとに訪問」を行い、入居者と共にスタッフも生活環境を肌で感じるよう心掛けています。	
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居者、家族からお話を伺い、これまでの生活歴、地域性を考慮し、アセスメントを行っております。また、実際に「ふるさとに訪問」を行い、入居者と共にスタッフも生活環境を肌で感じるよう心掛けています。	
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画を有効活用するためにも、スタッフみんなで協議した内容を原案とし、入居者、家族に意見や希望を伺い、入居者が今何を望んでいるのか、何を必要としているのかを介護計画として作成している。今年度からJCPATを取り入れている。	センター方式での利用者の内面的な把握のみならず、JCPATを新たに取り入れ科学的視点で客観的にみることは、利用者、家族の安心感につながるほか、法人全体の取り組みと記録の蓄積、比較から、様々なケアの長所短所を把握していくことにもつながる。今後の継続的な取り組みに期待したい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	入居者について気づきを連絡ノートに記入しています。また、日誌や個別記録に記録し、定期的に行われるミーティングで介護計画の見直しや課題等について話し合っている。	
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	短期利用については、家族からニーズが多く、継続して実施しております。長く入居される方には、多機能支援として、外出、外泊の支援をはじめ「ふるさと訪問」として、馴染みの場所への訪問の支援に心掛けております。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	年中行事の際等に地域の園児や学童クラブの子供達と交流を図っている。通いながたスーパーが震災で無くなってしまったが、新たに馴染みのお店となる様に毎日買い物に出かけている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診の際は一人ひとりかかりつけ医への適切な医療が受けれるよう支援できております。また、家族の力を借りながら受診の支援を行っております。入居者の様子がおかしい時は、かかりつけ医の先生に随時相談しております。	受診は可能な限り家族付き添いとしている。また、多数の利用者のかかりつけ医が協力病院となっているので、ホーム・家族からの相談にも乗ってもらっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職、看護職と職種は違っても日々の生活においては、報告・連絡・相談が常時出来ており、入居者に安心して生活をして頂いております。体調の変化や急変時にも24時間365日途切れることなく対応でき、スムーズな連携を心掛けています。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	昨年は2人の方が入院いたしました。家族、病院の先生と「ひまわり」とで相談をし、状態が安定したあとは、速やかに退院をし「ひまわり」での生活に戻っております。何か変化があれば、病院に連絡するという約束のもと、通常病院で行うリハビリに関しても、「ひまわり」にて行っております。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	震災後の混乱時の最中、2名の方の看取りを行いました。これまで培ってきた看取りに対するあり方が職員内で共有できており、自信を持って対応できました。本人、家族、主治医、他の入居者、職員とが一丸となって取り組みました。	一昨年看取ってきた経験をもとに終末期支援のあり方や事業所の対応について職員間で勉強会を重ねてきた結果、利用者2名を協力病院の医師の見守りの中、家族も一緒に最後を看取る等、事業所全体が自信を持って対応している。	「病院で亡くなるのは寂しい」という本人・家族の思いと医師、職員等の協力もあり、事業所としても納得のいく看取りとなっている。今後もこうした看取りのノウハウを継承しつつ、利用者、家族が納得した最後を迎えられるような継続的な取り組みに期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急の際の医療機関への連携や看護職員への連絡方法はマニュアルも作成しており実践できています。しかし、若い職員や経験の浅い職員もおり、応急手当や初期対応については、定期的な訓練が課題となっております。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	この度の震災によって、日頃の避難訓練の成果で隣接する事業所と連携して、すべての入居者皆さん無事に素早く避難できました。しかしながら、今回のような規模の災害であると、これまでの対策では不十分であることが実感できました。現在は法人を挙げての対策に取り掛かっております。	今回の震災においては、日頃の避難訓練の成果もあり、全員無事に避難出来たものの内容的には不十分であったとして、毎月1回(11日を指定日として)その時の事業所の状況に合わせて避難訓練を行うことに変更している。事業所としての災害対策は充実していく中で、災害時の地域との協力体制は引き続きの課題としている。	地域との協働も促進しやすい時機として地域の体制作りを話題にするものの、直接津波の被害を受けていない地区ということもあって、住民の意識に難しさを感じている。今の子どもたち、そのまた子どもたちの世代に何らかの成果を残していくという長期的な視点で、無理のない範囲で粘り強く働きかけていってほしい。

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	プライバシーや人生の先輩としての敬意や誇りに配慮した言葉かけや対応をスタッフみんなで心掛けております。しかし、馴染みの関係になればなるほど不適切な言葉使いや対応が出てくる場面がみられますので、スタッフみんなで声を掛け合って確認しながら直していく努力をしております。	一人ひとりの人格を尊重し、人生の先輩としての誇りやプライバシーに配慮した言葉かけや対応にスタッフ皆で心掛けている。また、馴染みの関係が深まるにつれて、言葉かけ一つについても、利用者本人が良くても家族が聞いて不愉快な思いをすることもありうるので職員皆で声を掛け合って確認しながら言葉かけをするように努めている。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活の中で入居者の意向に沿った生活が継続できるように心掛けております。ただ、入居者が混乱しないように、職員同士相談しながら入居者の意志を尊重し、スタッフも必要最小限に支援しております。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	生活のリズムを整えるという意味で、必要最小限に決まりを設けて、一人ひとりのペースに合わせてゆっくりと生活支援を行なっています。職員都合が優先されることが少なくなるよう心掛けています。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自分で髪を整えることが出来る方には鏡を見て整えて頂き、馴染みのくしを使い髪を結ったり、男性の方は自分専用の電気かみそりで身だしなみを整えます。食事の際、洋服に汚れがついた時は着替えをするように心掛けています。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	毎日の買い物と一緒に、食材を選ぶときから食事が楽しみになるよう心掛けてます。調理に関わって頂いたり、ごはんの盛り付け等にも関わって頂いてます。食器の後片付けも入居者、スタッフ共同で行うよう心掛けています。	朝・夕食に限らず昼食も事業所で調理するようになったので、ホットプレートを活用して入居者の前で調理し、皆で楽しく食べている。また外食にも出かけているが、以前から行っていた店の一つが震災の影響で利用できないため気仙沼まで出かけることがあり、ドライブの楽しさも兼ねながら利用者には好評である。	震災でボランティアが来た際、目の前で料理を作ってくれたことに利用者も喜び、その場面を続けていきたいことからホットプレートを活用している。また外食では「今、美味しいものを食べられるうちに」との思いから、豪華なメニューを頼んでいる。今後も可能な限り食事の美味しさ、喜びを大事にしていてもらいたい。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎食、食事摂取量の記録をとって把握し、「食が進まないときがあってもあたりまえ」の考えのもと、1日のトータルとして食事量を考えております。水分量に関しては、お茶の時間を設けてみんなで楽しく飲んでます。進まない時は、好きな物、イオンゼリーなどの工夫で対応してます。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアは出来ています。総入れ歯であっても、歯茎のブラッシング支援を心掛けています。また、自分で出来る方は、うがい、歯磨きを行って頂き、最後の仕上げの支援を行っている。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	日中はその人の様子や、間隔を見ながらトイレにお誘いし、トイレでの排泄を心掛けています。排泄記録によるパターンやサインの把握に努め、排泄姿勢の工夫も行うなど、気持ちよく排泄できるよう支援しています。	トイレ排泄を基本として排泄チェック表で排泄のパターン、排泄時間等を把握して誘導するように努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	一覧表で、一人ひとりの便の出た日、量、状態をスタッフ全員共有しています。毎朝食事前にはヨーグルトを飲んで頂いたり、新鮮な野菜や、食物繊維やビタミンB5の積極的な摂取など食生活にも心掛けています。運動可能な方への働きかけ等も取り組んでいます。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	昨年は午前中のみ入浴でしたが、前回の外部評価の際、貴重なアドバイスを頂きまして、現在は午前、午後どちらでも入浴可能となっております。今後はさらに発展させ、時間にとられず個々にそった支援を目指したい。	昨年は月曜日から土曜日にかけて週2回午前中のみ入浴であったが、現在は午前、午後どちらも入浴可能となり、時間帯に縛られない入浴に向けて一歩前進の状態となっている。今後は、この状態を更に発展させ、利用者個々に合わせた入浴の実現に向けて努力したいとしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの日々の生活に安らぎを持ってもらうため、日々の決まりきった予定表は無く、その方のその日に合わせて生活しています。夜間の安眠に関しては、一人ひとりに合わせたトイレ誘導、パット交換、体位交換をし安眠を妨げないよう心掛けています。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	スタッフ全員が入居者の薬に関わり、目的、用法、用量について把握する努力をしています。薬が変わったときなどは様子観察をし、変化があれば主治医に相談して、アドバイスを受けております。下剤に関してはその日の状況により、細かい取り決めをスタッフ全員で共通理解している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	お魚をさばいてもらったり、干し柿作りを教わったりと入居者さんが主役となって職員はサポートに回りこれまで培ってきた力を発揮していただいている。最近は外食に出かける機会を増やし、皆さんに好評を得ている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	週に一度はドライブに出かけます。時には被災現場を見ながら防災の教訓にしております。外食も積極的に行い家族をお誘いして楽しんでおります。外出の際は積極的に写真を撮って、後日みんなまで振り返っております。	曜日は、関係なしに週に一度は、出かけられる利用者とドライブに出かけている。行き先は被災した現場や季節に応じた花見、紅葉見物、外食などにも積極的に行っている。また、利用者家族にも参加を呼び掛け一緒に楽しむようにしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	残念ですが、現在は入居者でお金の管理をされている方はおりません。しかしながら、職員もこのままでいいとは思っておりません。今はできなくても、今後できるにはどうしたらよいか模索していきます。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族からの電話を楽しみにしている入居者さんがいますので、出来るだけ家族とお話して頂いています。手紙に関しては、今年は震災がありましたので、入居者、スタッフ共同で、手作り寒中見舞いを予定しています。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関や居室など入居者と一緒に季節を感じられるような飾り付けをさりげなく工夫して取り入れています。七夕、お月見など季節を感じています。また、お花の好きな方に庭からお花を摘んでいただき素敵な花瓶に入れてテーブルに飾って頂いています。	玄関や居室等には季節感を採り入れた花等を飾り、ホールには、利用者書いた習字の作品が飾ってあるなど居心地良く過ごせるような工夫がなされている。震災直後はホールに利用者や職員が集まり、寄り添う安心感のなかで寝食を共にした。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	入居者それぞれ居心地の良い場所があり、入居者同士穏やかに談話する関係が出来ております。時々、気が合わず大きな声を上げる方もいますが、お互い不快な思いをする前に職員が配慮しています。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に使い慣れた布団や家具を用意して頂いており、それぞれの居室は特色あるものとなっております。短期利用のお部屋は、利用される方に配慮し、畳みを敷いたり、好みの枕にかえたり等、居心地良く過ごせるよう工夫しております。	居室には、筆筒、衣類かご、鏡台、写真など入居者の使い慣れたもの、思い出の品々が持ち込まれ、一人ひとりの生活感が醸し出されている。また、居室の入り口には、手作りの表札とともに入居者の生活ぶりがわかる写真が飾ってあるなど、その人らしさを表現する居室となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	各居室には手作りの表札があり、自分の部屋が分からなくなっても確認することができる。昨年改築したテラスへいつでも行く事ができ、朝日を浴びたり、気分転換したりできる。		